

[論 文]

契約の組織神学 －啓示論・教会論との連関にある聖書論－

Christian Systematic Theology of Covenant The Doctrine of the Scripture in Relation to the Doctrine of Revelation and Ecclesiology

矢澤 励太

要旨

契約の教義学における聖書論は、聖書を神の永遠の意志決定と救済計画の青写真である贖いの契約に遡り、そこから淵源する神のその民に対する関わりそのものである契約の歴史の中で理解し認識するのである。聖書はこのように、いわば神の肝煎りの意志伝達手段であるがゆえに、神の啓示理解において基準的な位置を持つのである。聖書は「契約の書」として、神の「契約共同体」であるキリスト教会の形成、さらには神の「契約史」の歴史的推進力となる。

キーワード：聖書論 (doctrine of the Scripture)／啓示論 (revelation)／教会論 (ecclesiology)

I はじめに

本稿において構想する契約の組織神学は、日本において一人の信仰者が誕生していく歩みの中に現れる神の経綸を辿りながら構築していく神学である。日本社会において大多数のキリスト者は、人生のある段階においてまずはじめてキリスト教会と出会い、そこで礼拝をささげる集団(神の民)と出会い、聖書という書物を初めて手にする。あるいは進学した学校がキリスト教学校であり、そこで初めて聖書を手にし、学校礼拝で賛美歌を歌うことを覚え、聖書を開き、御言葉を聞く体験をする。

人生のある段階でこうしたまったく新しい体験が入ってきて、そこで新しく聖書が証しするイエス・キリストと出会うのである。そしてこのイエス・キリストが「アッパ、父よ」と呼びかける父なる神と出会う。やがてこの神の思い描く壮大な創造・救済・完成の世界経綸を紡ぐグランドストーリーが聖書の中に秘められていることを知っていく。そして自分の人生史もまたこの神の「大

いなる物語」(芳賀、1997)の中の一部であることを知るようになる。神の「経綸的三位一体」から「内在的三位一体」に理解が深められ広げられていくのが神学の筋道である。この信仰的認識の筋道に従って、日本のキリスト教組織神学を展開することがこのプロジェクトである。

先回はポストモダニズムと呼ばれる現代において、なおいかにして真理主張の根拠を明らかにし、神学の出発点を確保するかというプロレゴメナ(序説)の課題として啓示論を扱った(矢澤、2024)。アーヴィン・プランティンガ(Alvin Plantinga, 2000)の「非基礎づけ主義」(nonfoundationalism)の立場を援用しつつ、キリスト教の真理主張の根拠をキリスト教自身の内に見出すことを確認した。その意味では、キリスト教信仰は真理主張の根拠という観点では「自己参照」(self-referential)的でしかありえないし、「同意反復」(tautological)的でしかありえないだろう。それが真理であるということは聖霊によって内的に証示された信仰者においてこそ感得されるものである。キリスト教信仰は元来そうした真理認識構造を持っている。

その上で、キリスト教の啓示の歴史性について重要な確認をした。キリスト教信仰がその真理性

YAZAWA, Reita

北陸学院大学 健康科学部 栄養学科
キリスト教人間論

について、それ自身以外の外的な要素（歴史学、心理学、比較宗教学、医学、人間学等）による基礎づけを必要とするものではないということと、キリスト教が歴史的宗教であり、この世界の時間空間の中で生じた出来事と密接な連関の中で展開し、キリスト教信仰が歴史媒介的に成立するものであるということとは区別されるべきであり、それゆえ両立する事柄である。イスラエルの神の民としての召集、シナイ山での契約授与、出エジプトの出来事、バビロン捕囚、イエスの誕生とミニストリー、ゴルゴダの十字架に至るその生涯の出来事、イエスの復活を信じる群れから出発した地中海世界での一大伝道運動、これらの歴史的出来事は委細の史実的正確性は別にしても、大まかなアウトラインは歴史的にも確定できるものである。キリスト教信仰はこれらの歴史的出来事なしには成立しえない。その意味で歴史を媒介としつつ、聖霊なる神ご自身の働きかけによって生起するのがキリスト教信仰なのである。

これらの事柄を踏まえた上で、本稿ではキリスト教会の正典として位置づけられる「聖書」について、啓示論と教会論との関わりにおいて論じる。キリスト教会の正典としての聖書は、この歴史的世界における神の歴史的啓示が文字と言葉において形を取ったものである。ちょうど神の子がこの世に降り、人間の子どもとしてこの世界に宿った受肉の出来事のように、神の歴史的啓示が書物として受肉したのが聖書である。

この聖書は教会の正典として受け入れられているが、教会の礼拝においてこの聖書から御言葉が朗読され、その説き明かしとしての説教が語られる時、この語りはキリストを証しする神の言葉となる。こうして神の御前にある契約共同体としての教会において、聖書はこの契約共同体を歴史的に形成し続ける歴史形成推進力としての原動力となり、エンジンとしての働きをなす。なぜなら聖書そのものが神の御前を歩む神の民に与えられた「契約の書」だからである。契約の書物である聖書が、契約の共同体である教会を建て、歴史的世界の形成推進力となる。

このことを論証するために、プロテスタント・スコラ主義の神学者ペトルス・マーストリヒト（Petrus van Mastricht）が採用した神学の理論・実

践の体系的構造化で用いられた釈義的・教義学的・論争学的・実践神学的アプローチを復興させたい（Mastricht, 1698）。聖書には神と人間の間に織りなされる契約のナラティブのいわば原型スクリプトが内包されているのであり、これを読む者には歴史を救済史として読む視点と鍵が与えられるのである。

この聖書は一方では「教会」という歴史的共同体から生まれた。教会史的には紀元前2世紀ころまでの数百年にわたる旧約聖書の結集プロセスがあり、さらには紀元2～4世紀ころまでに結集する新約聖書の正典化過程があると考えられている。その意味で、キリスト教会が主体的に、どの書物が正典に含まれる書物としてふさわしく、どの書物は正典に入るべきではないという識別と判断を行ったのである。

しかしこの面のみを見るならば、正典としての聖書について、その本質を見誤ることになる。この正典結集の過程をもう一方の視点から見ると、聖書が教会をしてその正典として受け入れるように迫ったことになるのだ。カール・バルトは聖書自身がキリスト教会に対して聖書を正典として受け入れるように「迫った」と表現する。「聖書は正典である—なぜならば、聖書が、そのようなものとして教会に対し自ら「畏敬の念を起こさせつつ」迫ったし、繰り返し迫るからである」（バルト、1995、207）。教会が正典の範囲に入れられる書物を選びまとめたという先の観点はここでは逆転しており、むしろ自ずと結集してきた聖書が正典として自らを受け入れるよう教会に迫ってくる衝迫があったという理解になる。そこに働いているのが聖霊であり、聖霊による正典形成力が教会において働き、さらには教会という共同体の形成力ともなっていたことを看取する。

前者は事柄を歴史的に説明しようとするが、後者は同じ事柄を聖霊論的信仰的に受け止め直す。神学的認識は歴史性を媒介しつつも、なお歴史学的認識のみではその認識の十分条件を構成し得ないのである。キリスト教教義学の教義学的認識はこのように、事柄を聖霊の視点から新しく認識し直す「ひるがえり」（大木、2003、190-191）の認識を不可欠的に伴うものなのである。

聖書が神の「契約の書」として、神の「契約共

同体」であるキリスト教会の形成、さらには神の「契約史」の歴史的推進力となることを、以下に釈義的、教義学的、弁証学的、実践的アプローチを重ねつつ明らかにしていきたい。

Ⅱ 聖書論—釈義的アプローチ

キリスト教会の正典（canon）である聖書は旧約聖書39巻、新約聖書27巻、あわせて66巻から成る。「正典」と訳されている元のギリシア語は「基準」や「規範」を意味する言葉であり、端的には「物差し」や「尺度」を意味する。聖書は歴史の中でキリスト教会にとって「信仰と生活との誤りなき規範」（日本基督教団信仰告白）として受け入れられたのである。

どのような意味においてこの聖書がキリスト教会にとっての「基準」であり「規範」であるのだろうか。契約の教義学はこの問いに対して、聖書が「人間に向き合い関わり合う神の契約の歴史を告げる語りである」という意味において教会の「基準」となり「規範」となるのだと答える。聖書の中には神の契約の歴史が凝集されており、この契約史の中に入る者は、世界の歴史を神の契約史の展開として理解するまなざしを与えられるのだ。

この契約の教義学において、契約とは「神が人間を見捨てることなく、その救いと歴史の完成のためにこれに向き合い関わり合う中で、神と人間との間に紡ぎ出されるその関係性」であると定義づけたい。契約の「双務性」や「片務性」といった議論に立ち入ることなく、契約を広く神が人間に関わり合うその関係性と認め、この視点から聖書を紐解くならば、聖書はその冒頭から契約の歴史を描き出している。

被造世界の管理者として人間に委任を行う「創造世界における神の命令」（creation mandate）は、創世記の冒頭に登場する。「産めよ、増えよ、地に満ちて、これを従わせよ。海の魚、空の鳥、地を這うあらゆる生き物を治めよ」（1：28）。被造世界の管理者として人間は神の創造世界の中で特別な位置と役割を与えられる。これは神からのイニシヤティヴの中で人間が置かれた契約関係である。

その後のエデンの園における神との間に設けられた境界線を象徴する「園の中央にある木の実」

を食べてしまうことによる神との契約関係の破綻、エデンの園の追放、なおも人間を滅させることなく皮の衣を着せて守りを与えつつ、生きる道を残す関わりは神のイニシヤティヴの下にある神と人間の契約関係の継続を意味している。このことはその後、カインが弟アベルとの間に起こした兄弟殺しを巡り、カインが滅ぼされることのないよう守りの「しるし」を与えられることによっても反復される。

さらにはノアの洪水伝承において、洪水を生き延びたノアとその家族に「創造世界における神の命令」が再出される。「産めよ、増えよ、地に満ちよ。あらゆる地の獣、あらゆる空の鳥、あらゆる地を這うもの、あらゆる海の魚はあなたがたを恐れ、おののき、あなたがたの手に委ねられる」（9：1）。被造世界における神の審判は、決して被造世界を破壊し尽くさない。必ずそこに神の恵みと祝福を次の世代へと受け継ぐ少数の者たちが残される。これが「残りの者」の思想である。こうして聖書においては神の契約の物語が「残りの者」の思想と連動しながら紡ぎ出される。「私が地の上に雲を起すとき、雲に虹が現れる。その時、私は、あなたがたと、またすべての肉なる生き物と立てた契約を思い起こす。大洪水がすべての肉なるものを滅ぼすことはもはやない。雲に虹が現れるとき、私はそれを見て、神と地上のすべての肉なるあらゆる生き物との永遠の契約を思い起こす」（9：14-16）。

神の契約の歴史は神の民の父祖アブラハムとの間に結ばれるアブラハム契約へと継承される。アブラハムを諸国に対して「祝福の源」とする約束が、満天の星、浜辺の砂になぞらえて告げられる（15：1-6）。やがて神の民がエジプトの地で400年にわたる奴隷状態に苦しみことになる時、神はこの父祖たちとの契約を思い起こして出エジプトという解放の出来事に着手する。「神はその呻きを耳にし、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた」（出エジプト2：24）、「私はまた、エジプト人が奴隷として働かせているイスラエルの人々の呻き声を聞き、私の契約を思い起こした」（6：5）。

さらに国の上に人間を王として立てる王国のあり方に嫌悪と留保を保ちつつも、成立したイスラ

エル王国に対して、なお神は慈しみと守りの関わりを契約関係として継続し、それはダビデ・ソロモンとの契約として表現される。バビロン捕囚の時代には、離散した神の民が回復し再び一つとされる希望が預言者を通して、契約の神の信実として告げられる。

イエス・キリストは最後の晩餐で配られるパンとぶどう酒を神の契約のしるしとされ、旧約において「私はあなたと共にいる」と繰り返される主なる神の約束は、御子なる神であるイエス・キリストご自身の言葉として繰り返し告げられている。キリスト教会は新約の時代の「残りの民」として、神の契約の希を担う終末論的「契約共同体」としてこの世に証しを立てつつ歩む。

Ⅲ 聖書論—教義学的アプローチ

契約の教義学的として正典としての聖書を考察した時に認識されなければならないのは、聖書が神のイニシャティヴにおいて人間と結ばれた「契約の書物」であるということである。「旧約聖書」(Old Testament)、「新約聖書」(New Testament)という正典を構成する書物の名称そのものが、「旧い契約」と「新しい契約」に関する神の自己伝達を証しする書物として聖書が編まれていることを示している。キリスト教会の正典である聖書は何よりもまず神の「契約の書」なのである。

今日契約という概念は限りなく世俗化されており、人間の個人間、または個人と組織・団体との間に交わされる雇用関係や協定の意で用いられることがほとんどである。しかし聖書によれば、根源的には「契約」とは神と人間との間に交わされた相互の関わり合いに関する共通理解の表現である。

先に啓示そのものが、神の愛の自己伝達であり、神が人間に向けて理解可能な仕方で自己を表現してくださった愛の自己謙卑(ケノーシス)であることを確認した。「契約」もまた、神が人間に理解可能な仕方で自己を開示され、呼びかけ応答し合う人間との間の関係性に入ることをよしとされた、神の愛のケノーシスであると言える。人間の理解を超える全能者である神が、身を低くして人間に理解可能な仕方で自己を顕わし、人間に理解可能な仕方で人間との関係性に入られたからである。

ここにカルヴァンが強調する人間に対する「神ノ自己適用」(accommodatio Dei)を見ることが出来る(カルヴァン、2007、132 [I. xiii. 1])。

聖書論も契約論と同様、啓示論の一部であることを考えるならば、同じようにキリスト教会の正典である聖書も神の自己伝達、神の愛のケノーシスとして結晶化した、人間に対する「神ノ自己適用」として理解できるはずである。人間の理解をはるかに超える神が、人間に向けて身を低くして、人間に理解可能な言葉という方法をもって、人間に身を向け、関係性に入ることを自らよしとされたからである。

さらに興味深いことに、キリスト教の正典である聖書は、元来それが書かれた言葉、旧約聖書であればヘブライ語・アラム語、新約聖書であればギリシア語という言語自体を聖なる言語とはしない。すなわち翻訳という作業を禁忌とせず、むしろこれを大いに奨励する。宗教によっては聖典が書かれた元の言語を神聖化し、容易には翻訳を認めようとしなないため、聖典はそれが書かれた元の言語を母語とする特定の民族、もしくはその言語を新たに学び理解できるようになった人々にしか共有されず、それゆえ当該の宗教はその伝播力に限界を持ってしまう。

これに対してキリスト教はこの種の制約を持たない。正典としての聖書の翻訳は大いに奨励され、諸民族・諸国民に理解されるよう、諸言語への翻訳が絶えず行われてきた。宣教師が新しい国や土地に入っていった際に最初に行ったことは学校や病院で奉仕しつつ、その土地の人々とともに住むことを通じて言語を学び、辞書を編み、果敢に聖書翻訳に挑むことであつたのである。その土地に住む人々が、自分たちの読み書きする言葉で、神からの「愛の手紙」(加藤、2000)である聖書を読み理解することができるようにと尽力することは、聖書翻訳に従事する神の器を用いつつ、「神ノ自己適用」が継続していると考えられるのである。

ケヴィン・ヴァンフーザー(Kevin VanHoozer)は『教理のドラマ』(The Drama of Doctrine)において聖書翻訳の教義学的意味について触れ、翻訳を通じて絶えず新しい文脈における神のメッセージの即興演奏(improvisation)が行われていると

いう。「即興演奏」といっても、その時その場で出任せに行う演奏のことではなく、基本となるテキストがあり、これをその時と場において神の言葉に触れる者の文脈に最適化する営みのことを指している (Vanhoozer, 2005, 129-133)。聖書翻訳を通じて、いわば「神ノ自己適用」は繰り返し起こり、諸国・諸民族・諸言語に届く神の自己伝達、神の使信発信が継続しているのである。

さらに聖書は本来的に、読む者に信仰を引き起こし、また信仰をもって読まれることを意図し願って編まれたものである。それは神の意図と願いである。神の意図と願いを聖書から読み出し、語り出すことがキリスト教会に附託された説教の務めである。説教は聖書という畑の中に埋められている神の契約という宝を掘り起こし、聖書の中に展開している神と人間との契約のストーリーを語り出す営みである。語り出された聖書の契約の物語は聴く者を巻き込み、契約の民の物語へと傾聴する者の生の物語を包み込んでいく。このようにして契約の物語の前線は今日も拡大し続ける。契約のストーリーは絶えず運動している。このストーリーのフロンタラインは拡大し続け、契約の民を新たに生み出し続ける。

この説教の営みもまた、神のケノース（自己謙卑）であるといつてよい。神は言葉となって私たちの内に宿られた。神は言葉を通して神の自己伝達が行われることをよしとされ、嘉せられている。説教はその意味で、神の独り子の受肉の出来事を根源とし、この出来事の隠喩（メタファー）として機能している。こうしてキリスト教会における聖書は契約のストーリーとして、翻訳において、説教において、神の人間に対する「自己適用」として、神の人間に対する愛ゆえの謙卑として、神の自己啓示の手段となる。

以上の点を踏まえた上で、さらに認識をするべきことは、聖書正典はそのものが神の自己啓示ではなく、神の自己啓示の受け手である人間にとり基準的位置を持つ神の「手段」であるという点である。この命題の背後にあるのは、神の自己啓示は書物の中ではなく、時間と空間の展開する歴史の中で起こった出来事であり、現在も起きている歴史的啓示であるという理解である。啓示は書物の中や人間の意識の中に生起したのではなく、歴

史的 world の中で生起したということである。神の啓示は神と人間との契約の物語であり、この契約のストーリーは歴史的世界の中で展開した。

エジプトでの奴隷状態から解放された神の民は主なる神の自己啓示を目の当たりにする。「私がエジプト人にしたことと、あなたがたを鷲の翼の上に乗せ、私のもとに連れて来たことをあなたがたは見た。それゆえ、今もし私の声に聞き従い、私の契約を守るならば、あなたがたはあらゆる民にまさって私の宝となる。全地は私のものだからである。そしてあなたがたは、私にとって祭司の王国、聖なる国民となる」(出エジプト19：4-6)。指導者モーセには契約の神の約束が告げられる。「私はあなたがたを私の民とし、私はあなたがたの神となる。あなたがたは、私が主、あなた方の神であり、あなたがたをエジプトの苦役の下から導き出す者であることを知るようになる」(出エジプト6：7)。こうして聖書の神は歴史の中でその民を召集し、契約を結んでその民の神となられる。歴史に臨在し、歴史の中で働かれる神である。聖書はこの歴史の神の存在と行為を指し示し、証しする神の自己啓示の手段なのである。

しかしながら日本社会において聖書という書物はこのように読まれるべきものであるということとは自明のことではない。それゆえ日本において聖書は小説や人生の処世訓を集めた書物や、歴史的文献研究の一素材のように扱われることもある。だからこそどのような「場」においてこの聖書が読まれるかということが重大なのである。

聖書という「神の契約の書」はキリスト教会という「神の契約共同体」という場においてこそ、元来の神の意図に沿って読まれ得るのである。人は契約共同体であるキリスト教会とまず出会い、ここに足を踏み入れ、この教会で生起する礼拝というコンテクストにおいて聖書という契約の書物と出会うのである。「そこにある聖書」と出会う前に、人は「そこにある教会」と出会う。そしてこの教会において、聖書とその説き明かしである説教を通じて、聖霊において神と出会うのである。

神の歴史におけるアクションは、聖書という契約の書物に結実していった。しかし啓示はそこで聖書という書物の中にいわば閉じ込められてしまふのではなく、今度は聖書を正典とし、ここから

神の使信を語りだす説教という営為を通じて、さらなる神の契約の民を召集する歴所の中の運動として歴史の中へ発出していくのである。

プロテスタント教会において聖書の権威とは、この書物が「それを通して聖霊がお語りになる道具である」という点にある。「聖書の権威」の根拠には、聖書が証しする「啓示の権威」があり、「福音の権威」があり、それはまた「神とその御旨、御業の権威」に基づいているが(近藤、2021、226)、それはまた「聖霊の権威」とも言うことができる。聖書の権威とはつまるところは、「聖書がその道具的手段であるところの聖霊の権威」にはかならないのだ(Grenz, 2001, 65)。こうして聖書は一方でキリスト教会が正典として編んだものでありながら、同時にキリスト教会を形成する権威を持ち、説教を通じて聖霊における教会形成力そのものとなるのである。聖書が聖霊の力においてキリスト教会のアイデンティティを形成し、形成し続けるのである。「聖書のテキストにおいて明らかにされた過去に基づき、また未来のビジョンに沿いながら、我々の共同体的また個人的な現在を方向づけつつ、聖霊は聖書的語りを、我々において、我々の間に、新しい世界を形づくるために用いられる」(Grenz, 2001, 80)。

Ⅳ 聖書論—弁証学的アプローチ

キリスト教会の正典としての聖書の位置を巡っては宗教改革の早い段階から、カトリック教会とプロテスタント教会との間に理解の違いが鮮明化した。改革者ルターが「聖書のみ」を改革のスローガンとして掲げた時、それはカトリック教会の「伝統」を巡る教義の拒絶を意味していた。しかしこれはプロテスタント教会が「伝統」を全面的に拒否したことを意味するものではなく、聖書と並び立ち、聖書的根拠を持たないカトリックの伝統に関する教えを排したのであって、「伝統」理解そのものを拒否したわけではない。

そもそも「伝統」(tradition)とは「手渡す」、「受け継ぐ」ということを意味する言葉である。「伝統」の語源ともなるラテン語(trado)も「手渡す」、「受け継ぐ」という意味を持っている。キリスト教会は正典としての聖書が読まれてきた解釈の歴史を担っているものであり、時代と状況の中で

つねに繰り返し聖書に向き合い、これを読み直し、テキストを通じて語りかける神の声に繰り返し耳を傾け、その无尽蔵の豊かさを汲み出そうとする営為を重ねてきた。この営みそのものがキリスト教会の「伝統」なのである。改革者が拒否したのはこの正典としての聖書に根拠を持たない聖人や聖遺物を崇拜する伝統や贖宥状の売買によって操作できると考えられた救いの理解、また煉獄の教えといった誤った伝統理解であって、決して「伝統」そのものではない。

カトリック教会は啓示について聖書と伝統という2つの源流を考える。カトリックは20世紀になって大規模な自己改革を行った第2ヴァティカン公会議を経たがなおその啓示理解において聖書はそのものにおいてはなお形式的には不十分であり、その十全たる理解のためには伝統の手助けが必要であるとされている(Grenz, 2001, 113)。結局は聖書と伝統のいずれがその啓示理解において優位性を持つのかを巡るカトリックとプロテスタントとの間の議論は明確な結論に至ったわけではない(Grenz, 2001, 114)。

スタンレー・グレンツがこの継続する議論に一石を投じて提示するのは、啓示の源泉を伝統でも聖書でもなく、もっと根本まで遡る「無基礎づけ主義」(nonfoundationalism)のアプローチである。啓示の出来事を根本まで遡るならば、そこにおられるのは神ご自身である。ここでは「霊なる神」であり、「聖霊」ご自身である。

「聖書と教会共同体的伝統とを統合するのは聖霊の働きである。共同体の展開と形成、および聖書文書の生成と共同体における権威文書としての正典への結集、その両方の背後におられるのは聖霊である。教会共同体はこれらのテキストが、神の霊がそれらによって語りかけている手段であるということを見出したのである」。

(Grenz, 2001, 116)

一方で正典が結集する前から教会共同体は存在していた。口承型の伝承が存在し、共同体において受け継がれ、伝統の一部を形成していた。これを文書化し、共同体において規範的機能を担う正典としていく過程には、当該の共同体自身が主体的

に関わっている。しかし他方で、いざ正典が結集すると、この正典が「規範する規範」(norma normans)として教会共同体を規定し、教え戒め導く機能を発揮し始める。それゆえにこのプロセスは聖書が自らを正典として受容するように教会共同体に迫ってきた、とも表現されるのである。

この弁証的(dialectic)なダイナミズムの背景に存するのが聖霊なる神ご自身である。正典としての聖書も、共同体に伝承として受け継がれてきた伝統も、共にこの聖霊なる神を証しするものである。聖書が神の靈感(inspiration)を受けて書かれたものであるということは、聖霊なる神が聖書の諸文書を執筆した個人と共同体を通して、ご自身の御心を伝達し文字化したことを意味する(二テモテ4:16)。さらに聖霊は正典としての聖書が形成される前からもちろん働いており、正典結集が完了してからも働き続けている。聖霊は今も働き、信仰者と教会共同体の聖書理解を導き、時代と状況の中で新しく意味を発見させ、尽きない恵みを汲み出す営み、釈義と説教の営為を支えている。グレンツはこの聖霊なる神ご自身の継続した働きを、聖書靈感説のみに縮減させず、「聖霊の照明」(illumination)として認識する(Grenz, 2001, 66)。聖書の霊的感化による執筆と結集は、さらに広い聖霊なる神の「照明」の働きの一部なのである。

正典としての聖書と教会共同体の伝統とを、さらにその奥にある霊なる神ご自身の啓示としての照明の働きの有機的運動の一部として理解した上で、改めて事柄を整理したい。霊なる神は歴史に先立つ三位一体の神の内在的交わりにおいて、永遠における意志決定を行い、世界の創造と人間の墮罪、罪を克服するための世への御子の派遣と贖罪の業の実行、世界と歴史の救済と完成の計画を思い描いた。御父と御子との間の世を巡る救済計画の委任と受容が「贖いの契約」として交わされた。その契約の歴史的世界内における実行と適用の主体として派遣され、今もなお生きて働いておられるのが聖霊なる神である。この聖霊が世界の創造から神の民の召集、預言者の召命、捕囚から神殿再建における民の霊的鼓舞、イエス・キリストの生誕、受洗、その教えと業への同伴、教会共同体の召集と派遣、正典の結集、伝道の働き、歴

史の方向づけと推進に関与し続けてきた。

聖霊が人間の霊に働きかけ、肉の心においては悟ることのできない神の事柄に心の目を開かせる照明の働きを担ってきた。この聖霊による照明の働きは伝承として受け継がれてきていたが、正典の結集において収斂し、この正典を規範とする教会共同体の伝道によって改めて世界に向けて拡散していく。この働きを通じて聖霊は個人と共同体に働きかけ、個人の内に信仰を惹起し、神の民を新たに呼び起こし、招き集め、教会共同体に加えられる。この働きそのものが、永遠の昔に内在的三位一体の交わりの中で決意された神の意志決定とこれと連動した「贖いの契約」の、歴史における聖霊による実行と適用なのである。

聖霊による照明の働きを証しする基準としての位置づけを持つがゆえに、正典としての聖書は「規範する規範」として、「規範される規範」(norma normata)としての伝統に対する優位性を持つ。プロテスタント・キリスト教にとって、伝統とは何よりも、この正典である聖書を理解するために積み重ねられてきた解釈の重層的豊かさそのものであり、伝統はいつもこの正典結集に向かう流れの中にあり、結集した聖書の周辺を取り巻いている。

V 聖書論—実践的アプローチ

契約の組織神学において「実践」を語る時、それは17世紀プロテスタント・スコラ主義が意味したのと同じように、「理論」(theoria)と「実践」(praxis)の用語法の中で用いられている。「テオリア」とは事柄をその事柄そのものに即して、そのものにおいて理解をする観想の営為である。これに対して「プラクシス」とはこの「テオリア」が持つ力と影響がある目的地に向かって作用してもたらされる結果を意味する。したがって本稿がこれまでに論じてきた聖書論においては、プロテスタント教会における聖書の存在と機能が、教会共同体における信仰と生活においてどのような波及的効果をもたらすのかを検討することになる。契約の教義学における聖書論は、教会共同体においてどのような実践的意味を持つであろうか。さまざまな実践的意義と示唆が考えられるであろうが、ここでは以下の三つを挙げたい。

第一に、正典としての聖書の存在は信仰者にとって深い感謝と畏れ、謙遜をもたらす。聖書は世の造られる前から創造に始まる神の世界関与、終末における歴史の完成と御国の到来、神とその民の永遠の交わりに至る、神のグランドストーリーを人間に告げ知らせる、神の自己伝達の手段であり、その意味で啓示の基準的主要部分を構成する。

しかし近藤勝彦が強調するように、啓示の最奥にあるのが「神の自己伝達」であるわけではなく、啓示の最奥にあるのは「永遠における神の内において外に向かってなされた意志決定」である（近藤、2021、422）。神はご自身の本性においてそうせざるをえないがゆえに世界を創造されたのではない。神はご自身であることに耐えられなかったり、孤独を感じたりするがゆえに人間を創造されたのではない。そうではなく全能であり、ご自身において三位一体の愛の交わりの内にある神が、その愛に基づく自由なる意志決定において、世界を創造し、人間を創造し、神の民に身を向けてこれを召集することを選び取り、よしとされ、嘉したもう。

この根源的真理を知らされた者の内に生起するのは感謝と畏れ、謙遜である。正典としての聖書が教会共同体に与えられているのは、当たり前なことではない。神の永遠における意志決定に淵源する神の自己伝達である。神が自由なる愛において聖書を正典として神の民に与えることをよしとされた、神からの贈り物であり、賜物である。当たりの事柄、前提できる事柄ではない。それゆえこの正典としての聖書が神の民に与えられていること自体に、人間に理解可能な仕方でも身を低めご自身を開示される神のケノーシス（自己卑下）があり、神の栄光がある。

神の民はこの当たり前ではない、この聖書を神からの「愛の手紙」を受け取り、感謝に満たされる。これにより民は神がどのようなお方であり、何を願い、どのように神の民と関わっておられ、自分たちのアイデンティティーを知り、自分たちがなぜ存在し、どこに向かっているのかを知ることができる。「人の子は何者なのでしょう、あなたが顧みてくださるとは」（詩編8）と歌う詩人のように、神を畏れその栄光をたたえ、讃美する

者へとになっていく。

第二に、聖書はキリスト教会において朗読され、説教されるべき書物として編まれ、正典化の道をたどったことが認識されなければならない。聖書はキリスト教会という共同体的場において読まれ、理解され、生きられるべき書物であり、そのことを志向して結集されたものなのである。聖書は神が人間に身を向けて契約の関わりを持たれる契約のストーリーであり、それゆえにこの書物が読まれるべき第一義的場は同じく神の契約の共同体であるキリスト教会なのである。

正典としての聖書は一方ではキリスト教会が伝承を整序し結集することで編んだ書物であるが、他方でその過程そのものに聖霊なる神が働きかけしており、神の語りの書物として成立した。霊が聖書を正典として受け入れるように迫ったのである。こうして神の契約の書物を土台とし、これに導かれつつ、神の契約共同体であるキリスト教会は歴史の中を歩む。

日本社会においてキリスト者は多くの場合、生活や文化の中に聖書的価値観が浸透していたり、その残滓がなおみられたりするような環境で生まれ育つわけではない。そうではなく何らかのきっかけがあってキリスト教会の礼拝に出席し、礼拝に参加する中で初めて聖書に触れ、聖書から説教が語られるのを聴く。キリスト教学校において初めて聖書に触れ、聖書科の授業で聖書に出会う場合でも、この聖書はキリスト教会の礼拝で朗読されるべきもので、ここからその使信が汲みだされる説教が聴かれるべきものであるということが示される。それを指し示しているのがキリスト教学校のチャペル礼拝である。キリスト教学校の礼拝は、キリスト教会の礼拝に淵源する伝道戦線の前線にあり、伝道の広がり、裾野の重要な一部を形成している。キリスト教会のチャペル礼拝は、契約共同体としてのキリスト教会の礼拝へと向けて方向づけられている。

さらに言えば、キリスト教会の礼拝に参加する信仰者は礼拝を通し、聖霊なる神において神と出会い、この神が契約の神として自分に向けてご自身を顕わされたことを知るようになる。神の契約共同体であるキリスト教会の礼拝という場において、神の契約の書物であり正典である聖書に触れ、

聖霊において契約の神と出会い、聖霊の導きの下で洗礼を受け、教会員となり、聖霊において聖餐に与かる。

伝道の最前線において聖霊の導きの下で教会の礼拝に参加した信仰者は、イエス・キリストと出会い、契約共同体としてのキリスト教会の成員となり、創造主である父なる神を知り、「神を呼ぶ」ことを知るようになる。さらには世の造られる前から神の民の一人として数えられていた存在として自らを受け止め直すようになり、ついには神のこの世界における経綸の背後に、内在的三位一体の神における「内にあって外へと向かう永遠の意志決定」があったことを知る者となる。これと連動しているのが神の三位一体の交わりの内にある「贖いの契約」であり、永遠において御父が御子との間に結ばれた神の民の救いに関わる計画を巡る青写真としての契約である。こうして内在的三位一体が経綸的三位一体へと踏み出していく結節点に神の内なる「贖いの契約」があり、神の「内にあって外へと向かう永遠の意志決定」があるのだ。それゆえに最終的には正典としての聖書は、三位一体の神の永遠の意志決定とこれに基づく「贖いの契約」に淵源していることになる。聖書はこのような神の啓示を証しする書物として受け止めるキリスト教会という契約共同体の場において読まれるべきである。

第三の聖書論が示唆する実践的含蓄は、伝道論的・終末論的希望の射程である。世の始まりから展開してきた神の契約のストーリーは、正典としての聖書の結集に収斂し、そこから改めて突端を開き、世界史に向けて拡散していく。神の永遠の交わりの中で行われた「贖いの契約」から発する救済史の展開が聖書に内包されているのであり、「贖いの業の歴史」(*History of the Work of Redemption*, ジョナサン・エドワーズ、1989)の青写真が聖書に胚胎されているのである。

意図せず起きてしまった人間の墮罪の出来事への緊急対応では決してなく、途中で放棄され断念される契約の歴史でもない。そうではなく神が永遠のうちに思い描いた「贖いの契約」に基づく神の民の救済計画であり、人間の度重なる契約関係の破れにも関わらず担い通される神の契約の歴史である。その終着点は永遠の昔に神が三位一体の

交わりの内に構想された三一の神の永遠の交わりに神の民が迎え入れられ、「神が人と共に住み、人は神の民となる」御国の完成である（黙示録21：3）。それは永遠の昔に構想された神の「贖いの契約」の最終的成就であるといつてよい。

契約共同体であるキリスト教会において、この神の契約の書である聖書を正典として手にした民は、この完成と成就が約束されている神の契約の歴史を知り、そこに確かな「希望」を見いだす。聖書が内包する終末論的射程は神の民にとって希望をもたらす。たとえ歴史の中で神の救済計画が頓挫したり停滞したりしているように見えることがあっても、永遠の昔から決定されていた神の救済意志が貫徹されるという「万軍の主の熱情」（イザヤ9：6）が、神ご自身の言葉として約束されているからである。

聖書の言葉が神の意志を伝える言葉として書き記される際に働いた聖霊の「靈感」(inspiration)の働きは正典結集においてその働きを終えても、あらゆる時と場において、汲んでも尽きない神のいのちの言葉の含蓄は、個人と共同体に新しく意味と示唆をもたらし、気づきを与える(illumination)。

かつて神殿を中心とする祭祀によって成立していたユダヤ教は、エルサレム神殿の破壊と崩壊の後、離散を経験しても律法を守る民として神の民のアイデンティティーを刷新・堅持した。同じようにキリストにおいて集められた民は場所に限定されることなく、聖書を手にしていればどこへ行っても神の民として生きることができる「書物の民」(Book People)となったのである。

VI おわりに

ポストモダンと呼ばれる現代においてなお17世紀に展開したプロテスタント・スコラ主義の可能性を探究する本研究は、組織神学のプロレゴメナに位置づけられる聖書論を、オランダの神学者ペトルス・ヴァン・マーストリヒトが用いた釈義的・教義学的・弁証学的・実践的アプローチに倣いつつ展開することを試みた。

聖書は神の契約の歴史として万軍の主なる神とその民との契約（旧い契約）の歴史、さらにイエス・キリストにある契約（新しい契約）の歴史について語る、神の契約の語りである（釈義的アプ

ローチ)。この聖書の最奥には神の永遠の意志決定があり、神の民の救済を視野に置いた三位一体の神の「贖いの契約」がある(教義学的アプローチ)。グレンツが指摘するように、カトリック教会との間に継続する聖書と伝統との関係性を巡る議論は、聖書にも伝統にも先行する聖霊なる神ご自身の働き、「聖霊の照明」の中に両者を位置づけた上で議論されるべきである。プロテスタント・スコラ主義はその上で、聖書を「規範する規範」(ノルマ・ノルマンス)、伝統を「規範される規範」(ノルマ・ノルマータ)として位置づけ、伝統も聖書によって根拠づけられ、連関を認められる限りでその位置を持つものであり、何よりも聖書の解釈史が折り重なって重層的に形成されてきた教会の歴史的蓄積として理解されることがふさわしい(弁証学的アプローチ)。全能の神がその自由なる愛において身を低くし、人間に知解可能な仕方でご自身を顕わされたという意味で、啓示そのものが神の謙卑(ケノーシス)である。自由な愛に基づく神のケノーシスに出会った人間には神への感謝と畏れ、自分のありように対する謙遜が生まれる。また神の契約の書である聖書は神の契約共同体であるキリスト教会をその場として読むべきものであることを知り、聖書に内包される神の契約史・救済計画を仰ぐ希望の民としてそのアイデンティティを絶えず刷新される(実践的アプローチ)。

契約の教義学における聖書論は、聖書を神の永遠の意志決定と救済計画の青写真である贖いの契約に遡り、そこから淵源する神のその民に対する関わりそのものである契約の歴史の中で理解し認識するのである。聖書はこのように、いわば神の肝煎りの意志伝達手段であるがゆえに、神の啓示理解において基準的な位置を持つのである。

〈参考文献〉

バルト、カール(吉永正義訳)1995『教会教義学 神の言葉Ⅰ／1 序説／教義学の基準としての神の言葉』新教出版社

Edwards, Jonathan. 1989 *A History of the Work of Redemption*. Volume 9 of *The Works of Jonathan Edwards* New Haven, CT: Yale University Press.

Grenz, Stanley J. and John R. Franke. 2001 *Beyond Foundationalism: Shaping Theology in a Postmodern Context*. Louisville, KY: Westminster John Knox Press.

芳賀力 2001『大いなる物語の始まり』教文館。

カルヴァン、ジャン(渡辺信夫訳)2007『キリスト教綱要』改訳版 第1篇・第2篇 新教出版社

加藤常昭 2000『愛の手紙・説教：今改めて説教を問う』教文館

近藤勝彦 2021『キリスト教教義学』上 教文館

Mastricht, Petrus van. 1699 *Theoretico-practica theologia*. Utrecht: Thomae Appels.

大木英夫 2003『組織神学序説－プロレゴメナとしての聖書論』教文館

Plantinga, Alvin. 2000 *Warranted Christian Belief*. New York, NY: Oxford University Press.

Vanhoozer, Kevin J. 2005 *The Drama of Doctrine: A Canonical Linguistic Approach to Christian Theology*. Louisville, KY: Westminster John Knox Press.

渡辺善太 2019『善太先生「聖霊論」を語る』渡辺善太著作選14 ヨベル選書

矢澤励太 2024「契約の教義学序説－ポストモダニズムの時代におけるスコラ主義の復権－」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部 研究紀要』第16号、111-124頁